

増補 黒衣の短歌史 中井英夫



潮出版社

中井 英夫（なかいひでお） 作家。1922年東京に生れる。著書『虚無への供物』（講談社）『中井英夫作品集』（三一書房）『見知らぬ旗』（河出書房新社）『幻想博物館』（平凡社）『眠るひとへの哀歌』（思潮社）『悪夢の骨牌』（平凡社）『黒鳥の囁き』（大和書房）『黒鳥の旅もしくは幻想庭園』（潮出版社）『彼方より』（潮出版社）等。

増補 新装 黒衣の短歌史

昭和 50 年 2 月 20 日 印刷
昭和 50 年 2 月 25 日 発行

著 者 中 井 英 夫
発行者 島 津 矩 久

東京 都 新宿区 南元町 14-1
発行所 株式会社 潮 出 版 社
電話(357)7111(代) 振替東京61090
〒 160

印刷 中央精版印刷

製本 牧製本

落丁・乱丁本はお取替いたします。
©H. Nakai 1975 Printed in Japan

黒衣の短歌史・目次

はじめに……………9

▼二十代について 12

昭和二十年～二十三年……………15

第二芸術論の意味——「八雲」と木俣修——斎藤茂吉の絶唱——
新歌人集団の活躍——「人民短歌」のこと——無名の集団——

昭和二十四年～二十五年……………25

歌壇の秩序について——作品の多すぎる歌壇——「色彩と夢」
——当時の新人たち——葛原妙子の登場——戦後派の退潮につ
いて——笠井正弘のこと——「青炎」と「工人」——「女人短
歌」と片山広子——歌人の選歌について——茂吉の歌稿

▼斎藤茂吉・窪田空穂両先生をお尋ねして 31

▼さよなら一九五〇年 44

▼大谷友右衛門丈と語る——短歌と歌舞伎と—— 53

▼短歌に関するアンケート 64

▼第三の世界——笠井正弘君の手紙から—— 72

▼独創について 85

▼隕石と極楽鳥 88

▼職場短歌ルポルタージュ——日本製鉄—— 92

▼海外の短歌雑誌 96

昭和二十六年～二十七年

104

岡麓の死——『女人の歌を閉塞したもの』——土屋文明と『アラ
ラギ』選歌——『帰潮』と『晩夏』——「局外批評」について

——前田夕暮と『わが死顔』——塚本邦雄の登場と『前衛短歌の
反省』——岡井隆と寺山修司——中堅歌人たち（坪野哲久ほか）

——斎藤正二のこと

▼とらんぶ 105

▼前田夕暮先生との一時間 127

▼南原総長と短歌 139

▼歌人印象記 141

▼歌人文体模写 147

▼歌壇鬼語 150

昭和二十八年～二十九年

茂吉と遙空の死——高尾亮一——歌壇の改革——「多磨」の分裂

——新歌壇地図——清新な抒情（高安国世ほか）——『未来歌集』

と田谷鋭——中城ふみ子と寺山修司の登場——中城の死をめぐる

て——石川不二子の魅力——「十代」の進出——上田三四二と菱

川善夫——外の歌壇と内の歌壇

▼光の函 173

▼送風塔 179

▼無用者のうた① 195

▼十代について 204

▼啞の唄
208

昭和三十年以降
.....
214

寺山攻撃とネフローゼ——相良宏の死——杉山正樹の活躍——前
衛短歌の興隆——青年歌人会議——岸上大作のこと——新人の氾
濫——清原日出夫ほか——春日井建『未青年』——浜田到の登場
と死——無意味の意味——村木道彦と実朝

▼無用者のうた②
223
▼火星植物園ほか
226

おわりに
.....
244

▼墓の前で
245

現代短歌論・目次

模倣のすすめ 249

無用者のうた——戦後新人白書—— 260

現代の魔女——葛原妙子小論—— 280

短歌の墓 287

眠れゴーレム——寺山修司論—— 291

“夏のために”——『岡井隆歌集』—— 305

標的としての現代歌人 310

直立する男魂歌・佐佐木幸綱①——反骨に伴う気品・福島泰

樹②——たおやかな歌腰・馬場あき子③——月光の魔術師・

塚本邦雄④——黄金の苦痛者・葛原妙子⑤

緑の翼——石川不二子小論—— 322

むなしさの母胎 331

クウェート国通信 335

あとがき…………… 340

装
幀
司
修

黒衣の短歌史

はじめに

私は昭和二十四年一月から昭和三十五年六月までの足かけ十二年間、日本短歌社の「短歌研究」と「日本短歌」、角川書店の「短歌」三誌の編集長をつとめた。年齢にして二十六歳から三十七歳までである。これらの雑誌はいわゆる歌壇の総合雑誌——商業誌であって、「アララギ」などの歌人が主宰する結社雑誌とは違うものだが、その間の私は歌舞伎の黒衣くろでさながら、つとめて表へ出まいとし、本名で短歌評論を書いたり歌集の月旦をしたりということはなるべく慎んできたものの、なにぶんにも長い年月なので、その間、匿名あるいは記者として書き綴った文章は相当の量にのぼる。整理してみるとその折々の雑文とはいえ、おのずから戦後短歌の側面を語って「黒衣の弁」をなしているので、潮出版社のおすすめに従い、中から現代にも通じる問題を含んでいると思われるものを選んで一冊にまとめることにした。多少とも資料として意義のあるよう、昭和二十年から二十三年までの歌壇瞥見をつけ加え、二十四年からは二年ごとの年度別として、合間々々にその年度の主な出来事とか作品とかを回想ふうに記したが、それはあくまでも心

おぼえていどのものだから、この歌集の名があがっていない、誰その歌が出ていないなどといわれても仕方がない。世話になった方々の名前も逸しているし、土屋文明をはじめとして、宮柊二、佐藤佐太郎、近藤芳美といった現在も活躍中の戦後の代表作家の作品も克明に追うことをしていないのは、その旧作はいまでも文庫本などで読み返し得ることだし、ここではむしろ世間一般の読書人にあまり知られていない他の魅力ある作家の紹介と、この先どんな短歌史が書かれようと、取上げられる筈もない投稿家クラスの忘れがたい一首などから、「もうひとつの戦後短歌」を描こうとつとめたからである。

戦後短歌史の試みは私の編集時代にも数回あり、その後も昭和三十五年八月号の「短歌」に富士田元彦の編集で「戦後短歌のすべて」と題して代表作や評論を再録した一冊があるし、近くは同じ誌上で昭和四十三年から四十五年末までのまる三年間、上田三四二、岡井隆、岡野弘彦、篠弘、島田修二ら五人の共同討議と分担執筆になる労作が延々と連載された。また、社会思想社から出た教養文庫の一冊は斎藤正二の編で、懇切な作品集にもなっているが、今回はあえてこれらを参照しなかった。公平に厳正に書くことが目的ではなく、むしろ十二年間の思いを率直に吐き出すことに主眼をおいたためでもある。文中の敬称はいっさい略させていただいた。

従ってここに集めた文章は、以下に一例をおめにかけるように、いわば黒衣の胸中に渦巻く愛憎の思いであって、それ以上のものではない。地味にうしろに控えながら、私は心のうちで激し

く短歌を愛し、またそれ以上に現代短歌を憎んだ。何より少年の日に『赤光』や『桐の花』がもたらしてくれた色彩と夢とが、戦後の歌壇にはかけらも見当らず、すべてが一樣に灰色の生活短歌、倦くことのない身辺雑詠のくり返しということがぶきみでならなかったのである。むろんこれは明治以降「アララギ」や自然主義の歌が歌壇の主流を占め、万葉は大事にされても、新古今を作歌の典拠とすることは許さないほどの風潮が続いた果ての当然の結果であるが、それにしても若者の夢や憧れをそのまま明るく短歌に托することさえ、その当時にはあきらかに罪惡とされていた。しかも重々しい口調でその罪状をいい渡す長老の中には、かつての青春短歌の輝かしい旗手さえまじっていたのである。

すでに昭和十八年、北原白秋、与謝野晶子という浪漫の星は没していたが、私が初めて編集にたずさわった昭和二十四年には、現在もなお作品活動を続けている土岐善麿、土屋文明はもとより、明治五年生まれの佐佐木信綱を最長老に、斎藤茂吉、窪田空穂、吉井勇、釈迺空、前田夕暮、あるいは尾上柴舟、太田水穂、川田順といった、いずれも教科書でその名に親しんだ大家がことごとく健在だった。それに続く五十代、四十代の層はさらに厚く拡がり、歌歴は古くとも宮城二、近藤芳美といった四十歳近い歌人がまったくの新人として扱われていたのだから、二十代や十代など登場する余地もなかった。いることはいてもすべて結社に属して、主宰者の指示どおり盆栽めいた歌を作っているのが、同じく二十代だった私には何よりふしぎでもあり齒がゆくもあった。

それについての一文——これは、「日本短歌」昭和二十四年八月号の「螺旋階段」という欄に無署名で載せたもので、かなづかいのみを新かなに改めた。本文中の再録文章も、同じようにすべての標題に▼印を付し、終りに**印をつけることによって区別がしてある。また短い引用はへ印で上下をくくった。

▼二十代について

本誌先月号の座談会に長谷川銀作氏は二十代の登場に触れて、「牧水が『海の声』で出たような出方でなくちゃ面白くないよ」と述べ、近藤芳美氏から手きびしい反対を受けているけれども、二十代の出現について、しかく樂觀的な人々は存外多いに違いない。いかにすぐれた種子にもあれ、土に播いただけで芽を出し花をひらくわけもないのは、いまだき幼稚園の生徒でも心得ている筈なのに、陽もささず雨もうるおさぬ荒野にばらまかれた二十代については、だらしがいない、才能がないの、どうしたんだらうのと、皆々すこぶる不満の面もちである。はては茂吉をみよ、牧水を上げということになるのだらうが、そういうオプチミスト自体のお尻に、むざんや若芽のいくつかが、げんに押しつぶされているに違いない。これら巨大な Backen の所有者たちは、古往今来つねに天才の発芽を身をもつて、防いできた癡猛なる一族の子孫に他ならず、やりきれぬことに長命と暗愚を最大の特徴とすることは、どこの国の文学史をひもといても明らかな事実なの

だ。

だが今日、二十代の耳は彼らの幸福そうな寝言などきいているわけではない。「その日その日」はすでに晩年でさえなく、限らない幻影の反芻にすぎぬ。時間はその前に還流し、未来は過去の裡にのみ実現する。実社会のかれらがもっぱら小器用な世渡りを事とするのは、すでに「世俗」の檻褸のみを残された世代の悲劇に他ならない。キャバレーのスノップ、学生ビーナッツ、賈コンミニスト、賈貴族。どれもこれも哀しいポオズなのだ。

生まれた時からの日蝕。見えない海を眺めている遠い眸。廃園を幻の薔薇で埋める秘かな魔法。——この少年たちをトッチャン小僧と罵るのも勝手だが、いくら大正ふうな芸術概念でシメギにかけたところで、芸術のゲエの字も出るわけがないことは忠告しておこう。忘れたのだろうか、稚い彼らを氷の中に閉じこめた昔を。その中で彼らがわずかに息づき、喘ぎながら生命だけを保っていた、つい四年前を。華麗無残な氷の中の花がようやく取り出されたいま、どういう昂ぶりと無知とが、これにりんりんと花ひらくことを要求できるのだろうか。

くどくどしくこれ以上、二十代の声なき歌について述べるのは差控えよう。ただ、いま瀕死のうすら眼をあいている彼らのまなぶたに、不思議な幻想の描かれていることを、かつて触れたことも見たこともない巨大な薔薇が一輪燃え立っていることをおぼろげに察していただければ、彼らの虚無の葬送歌は完成する。「花開かぬ」二十代を、おそらくは死ぬまでいぶかり続けるであ

ろう先進たちともども、腐土となり香ぐわしい肥となることだけが残された彼らの道であり、それのみが二十代の「芸術」なのではないだろうか。

従って同じ座談会に、くり返し近藤氏が述べている「三十代になってから青春歌集を出す」ことも、墓碑銘に処女作を刻めという哀しい提言ではあるけれども、彼ら二十代にふさわしい案ではあるまい。雑草に埋もれ、海風に吹かれているのつべらぼうの石の墓。それひとつさえあれば、百万人の二十代は快い眠りにつくであらう。

ただ、わたしらのものではない、

——海の向うの落日。
